ぼくらはみんな
いきている

２０２６年　立花吾嬬の森小学校

生き物の夏

　夏が近づき、様々な動植物が生き生きとしてきました。
　みんなの身近にいる鳥たちも、卵を産み、ひなを育て、仲間を増やそうとしています。

あるズズメの一家

　スズメの家族の巣に、３つの卵が産まれました。一生懸命にえさを食べ、すくすくと大きく育っています。

ある風の強い日に

　大変なことが起きました。強い風が吹いた日、３匹のひなたちはふるえていました。おなかもすいているし、風も強いし、何よりもエサをさがしに町に飛んで行った親鳥が帰ってこないのです。

落ちてしまった弟君

　さらに強い風です。雨も降ってきました。大きく巣が揺れた時に、一番下の弟ひなが、地面に落ちてしまったのです。

助けられない兄弟たち

　地面に落ちたひなが鳴いています。
　でも、お兄ちゃん、お姉ちゃんびなには何をすることもできません。上から鳴いて家族が帰ってくるのを待つだけです。

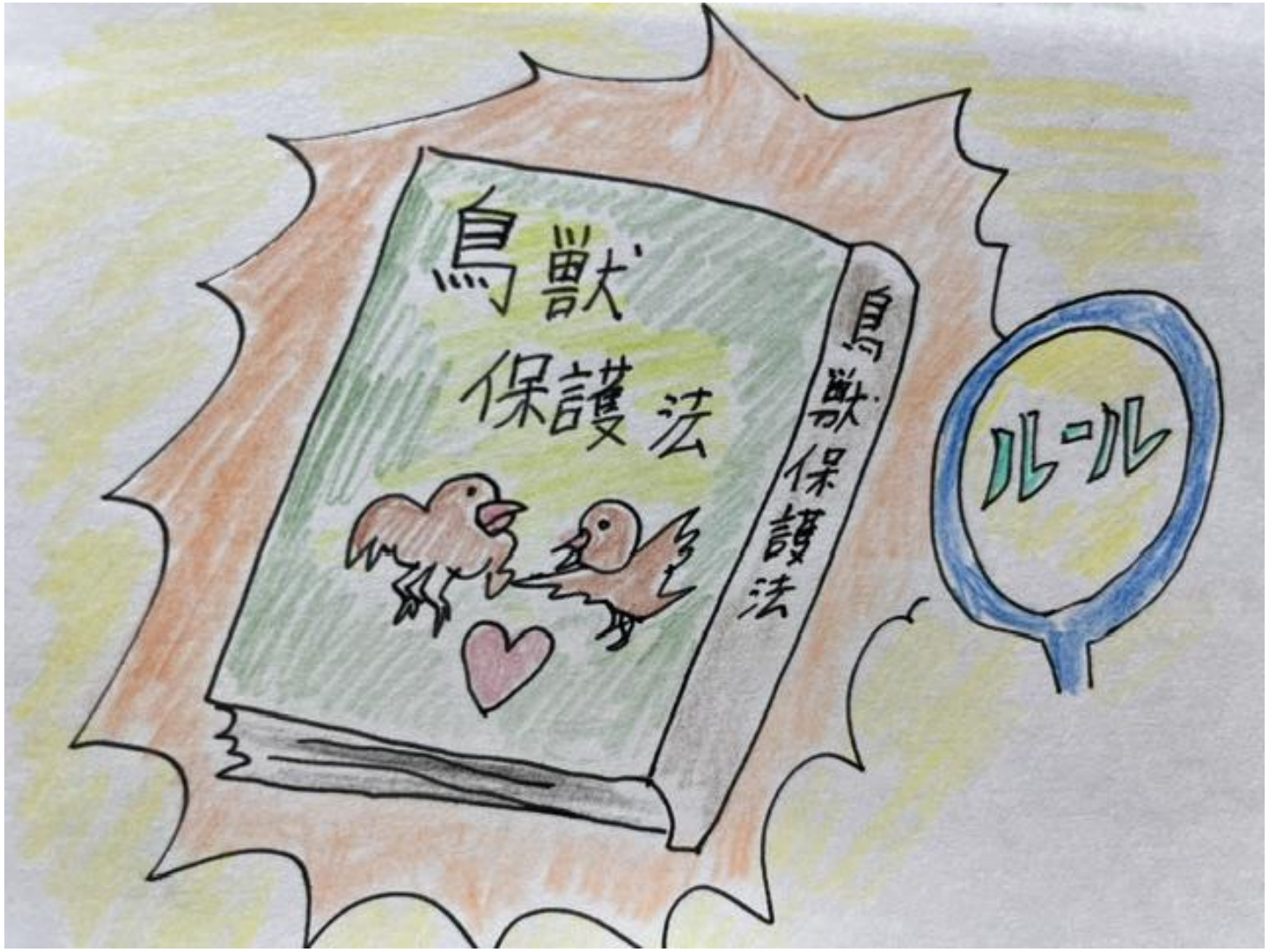
通りかかった小学生

　そんな時に、地面に落ちたひなをやさしい小学生が見つけてくれました。
　「大変だ。何とかしなくては。」
　近くにいた管理員のおばさんに相談をしました。

「校長先生に相談してみよう。」
　小学生は思いました。

なやんでしまった校長先生

　管理員さんが校長室にひなを手にしてやって来ました。
　「校長先生、ひなを助けることはできませんか？」
　ところが校長先生からは返事はなかなか返ってきませんでした。
　「うーん」
　うでを組んだまま、だまりこんでしまいました。

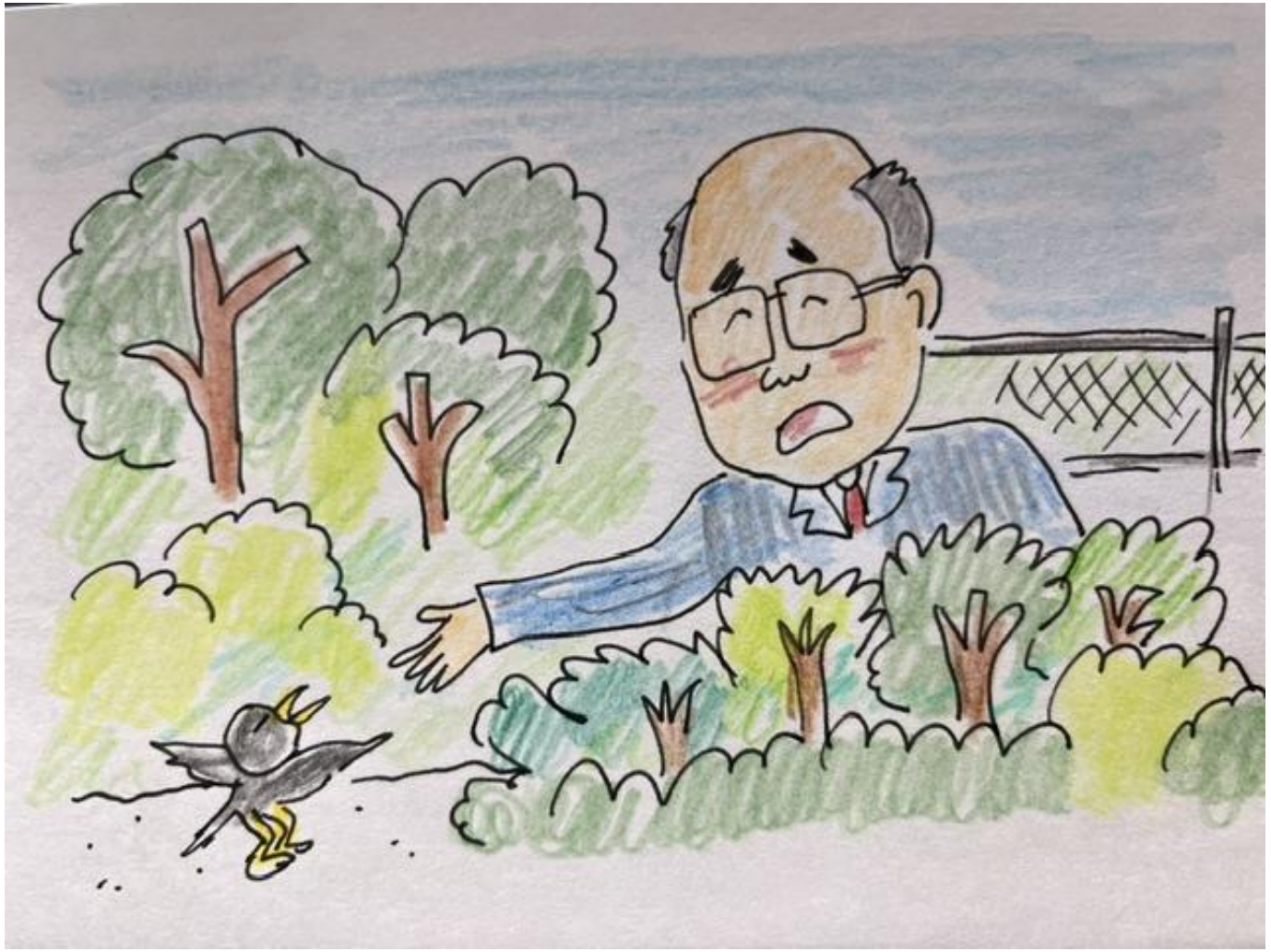


校長先生のなやみの理由

　校長先生がなやんだ理由はこうなのです。

　野生の鳥、つまり森や町に住んでいる鳥を人間が飼ってはいけないことになっているのです。

　これは「鳥獣保護管理法」という決まりがあって、自然の中で生きている鳥を、人間が世話をしてしまうと、自分の力で生きていくことができなくなるからなのです。かわいそうだけれど、地面に落ちてしまった鳥も、自分の力で生きていくか、それともそのまま死んでしまうか。自然の力に任せることがルールとなっているからなのです。



校長先生の決断

　だから校長先生は悩みながら厳しい言葉を口にしてしまいました。
「ルールを守り、そのままにしておきましょう。かわいそうだけど、木の茂みの中にそっと置いておくことにしましょう。」と

ドキドキしてきた心の中

　時間がたつにつれて校長先生はひな鳥のことで頭の中がいっぱいになってきました。
　大丈夫かな？しげみの中で元気にしているかな？
　大丈夫だ。いや、大丈夫じゃないか…どうしよう。
　そっと見に行ってみようかな。

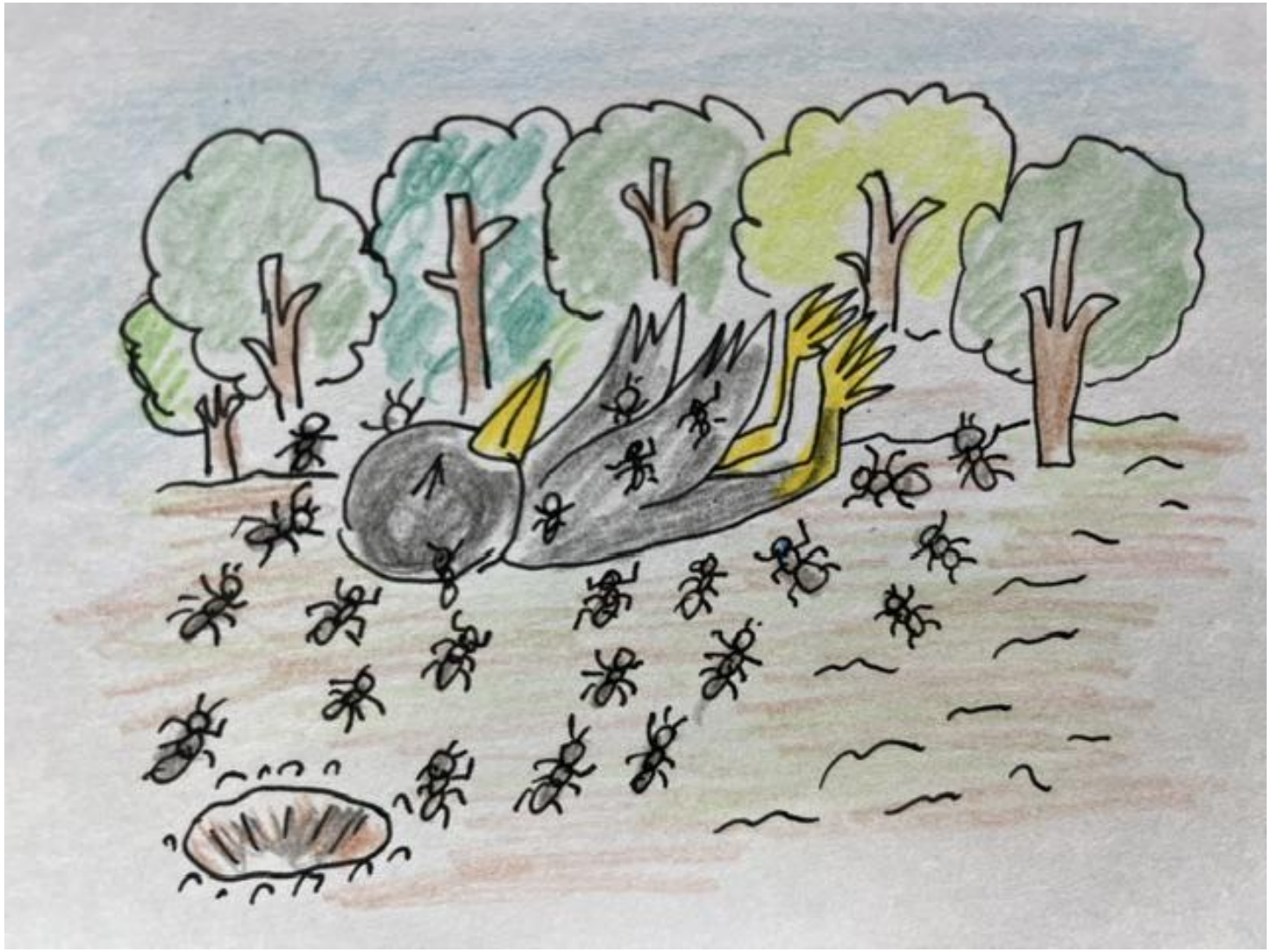
そっと見に行く

　校長先生はとうとうがまんできなくなってしまいました。

　心配なので、そっとしげみの中をのぞいてみる見ることにしたのです。

「あっ！」

大きな声でさけんでしまいました。



ありまみれのひな鳥

　目の前には、真っ黒になったひな鳥が横たわっていました。

　元気がなくなったひな鳥を、アリたちが集まって巣の中によいしょ、よいしょと運んでいるのです。
　小さなアリでも、たくさん集まると大きなひなのことを運ぶことができるのです。
　巣あなに向かって、大きなひなを引っ張っていました。

ありをふりはらう

　あわてて校長先生はひなをケースの中にうつしました。
　そして、体中にまとわりついているアリを、一匹ずつおはしでつまみ出していきました。
　はらってもはらっても、次から次へとありが羽の中から出てきます。
　ようやく最後の一匹をとりのぞいたのですが、ひなはぐったりとしています。

優しい子供たちの登場

　そんな時、休み時間になり、子供たちが集まってきました。

　「どうしたんですか？」優しい子供たちがひなのことを心配し、ある子は水をあげようとし、ある子はカメさんのえさをだんごにしてひなの口元にあててくれました。

「もっとやさしく食べさせなくてはいけないよ！」

「じゃあ、向きを変えてみよう」

　子供どうしで相談しながら、一生けんめいに
弱っているひなの世話をしてくれたのです。

きせきのしゅんかんへ

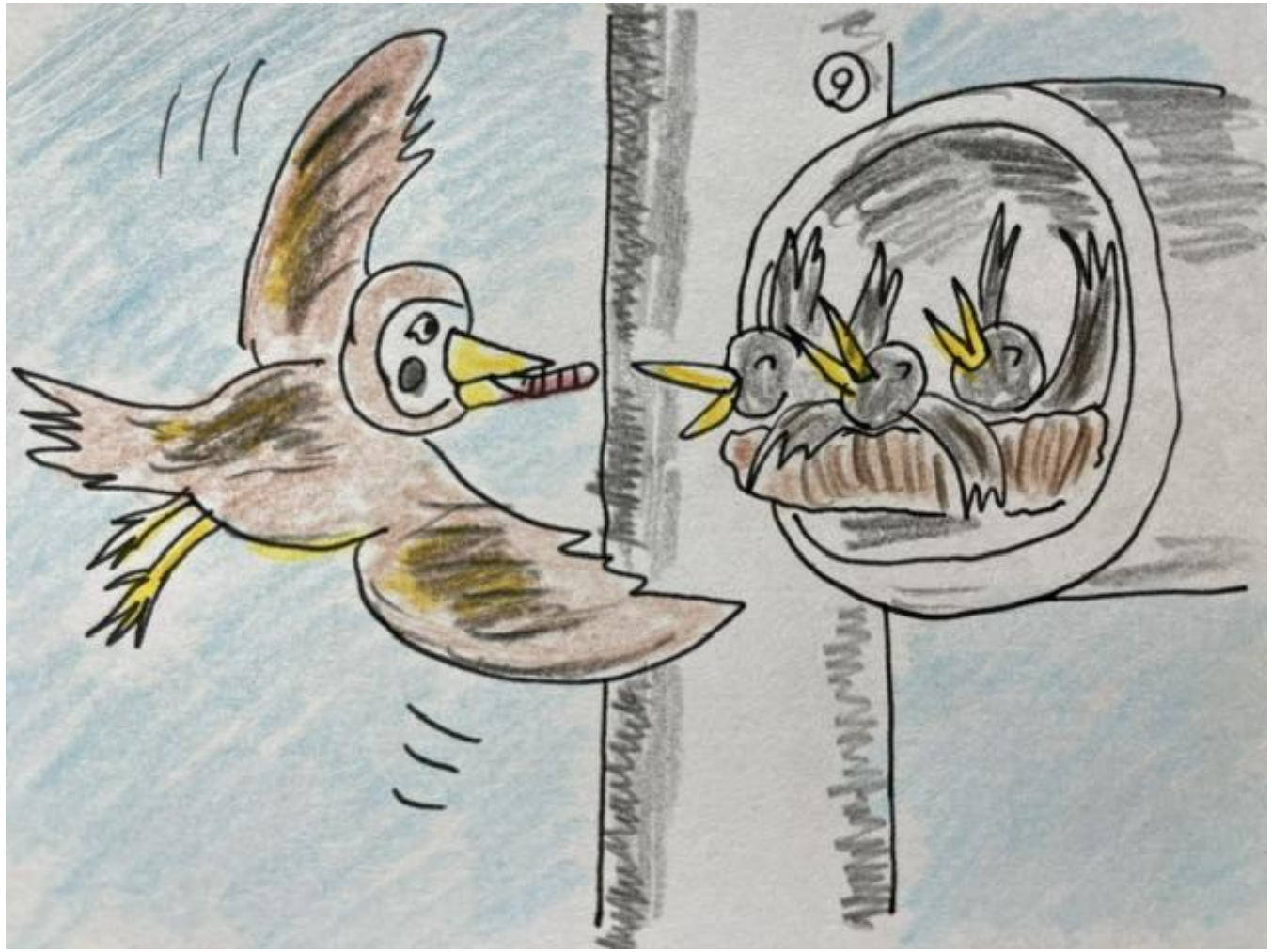
　みんなが頑張ってくれたおかげで、ようやくひなが口をあけるようになりました。
　そして、その口の中に、ストローを使って、水を少しずつたらしてみました。
　ピーと、ひと声でもいいです。鳴いてくれたら安心するのですが。
　でも、時間切れです。
　校長先生は、その日は出かけなくてはいけない日だったのです。ひな鳥を管理員さんたちにお願いして出かけていきました。

家が見つかる

　管理員さんが前から気になっていたことがあったことを思い出しました。

　そういえば、時々、校庭のポールの中から「ピーピー」と鳥の鳴き声のようなものが聞こえていたんだよな。

　はしごを伸ばして、ポールをのぼってみました。



巣に戻ったひな鳥

　大発見です。実は、ここに巣があったのです。
　ポールの横に空いた小さなあなの中に、スズメが巣をつくっていたのです。

　管理員さんは、そっとひなを巣に戻してくれました。そして、その後の様子をそっと見ていました。
　すると大変なことが起こりました。親鳥がどこからか飛んできて、えさをひなにやり始めたのです。管理員さんは、ほっとしました。そしてこんな写真を一枚、とってくれました。
　親鳥が出たり入ったり、ひなのためにえさを運び始めたのです。

　校長先生は何も知らず、電車に乗っていました。そこにこのうれしいニュースがメールとして届きました。

　ああよかった。これもあの時、一生懸命にひなの世話をしてくれた子供たちのおかげだ。それに管理員さんのおかげだ。その日はうれしい。うれしい日となりました。

自然のきびしさ

　今回のひなは、そうやってお家に戻ることができました。大人の鳥になって、この夏は青空を元気に飛び回ることでしょう。

　そのつぎの日、中学生ぐらいになったスズメをみんなが見つけてくれました。ケースに入れて校庭の桜の木の下においておくと、親鳥とピーピーと声をかけ合って、元気になってきました。親鳥も、一生懸命にえさを運んでくれていたのですが、残念ながら途中から雷が鳴り、雨が降り出してしまいました。そのままでは大変なので、校長室に入れ、一晩おいていたのですが、悲しいことに翌朝、冷たくなっていました。

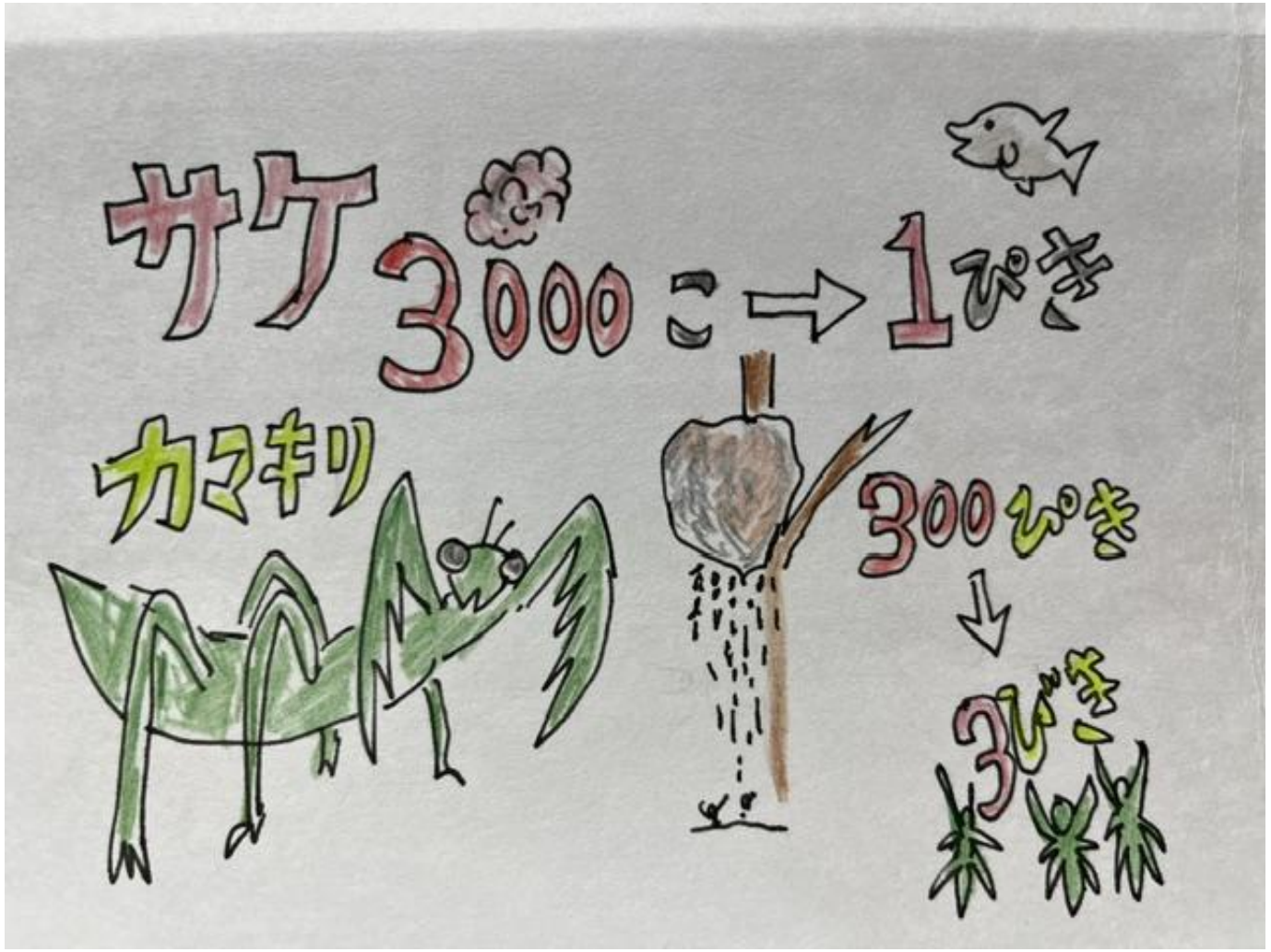
調べてみると

　とても悲しいことだったので、いろいろ校長先生は調べてみました。

　実は自然の中で、巣の中にいるひな鳥は、親鳥が何度も何度もエサを口まで運んでくれているのです。くちばしからくちばしへ、それもピヨピヨピヨと鳥の特別な言葉でお話をしながらやっているんですね。人間にはまねできない、親鳥の特別な力なのです。だから、その親からはなれてしまったひなは生きていけなくなるのです。いくら人間ががんばっても、親鳥の代わりができないのです。

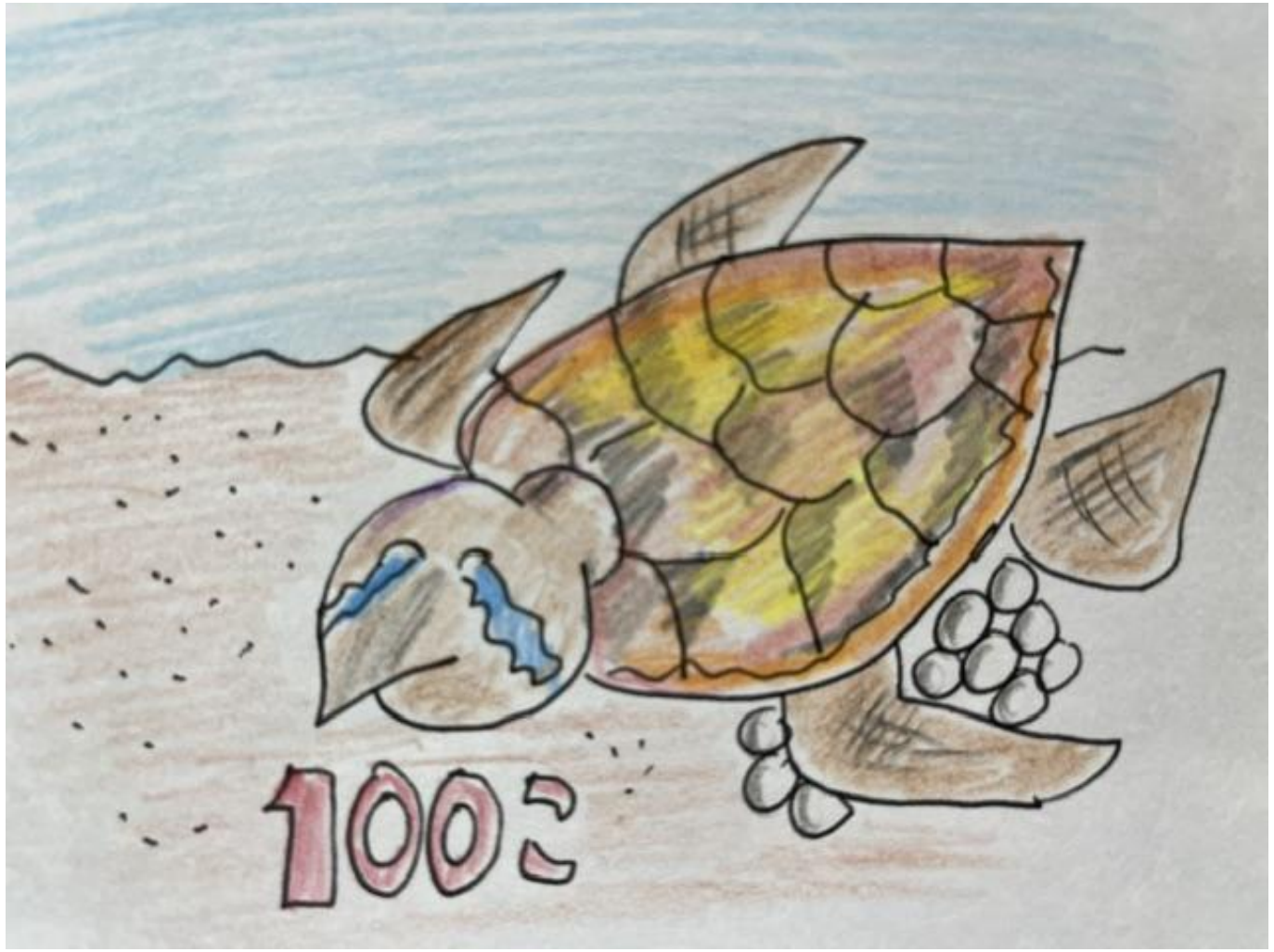
　ぼくらはみんな生きているという歌があります。「手のひらを太陽に」という題名で、あのアンパンマンの作者、やなせたかしさんが作った歌です。どんな小さな生き物でも、親からの命を受けつぎ、一生懸命に生きているんです。ミミズだって、おけらだってという歌詞にもなっていますね。

　調べてみたらこんな数字がわかりました。魚のサケです。あのサケのお母さんは卵を３０００個ぐらい生みます。それが赤ちゃんになって、海の中をただよって、結局大人になるのは何匹の赤ちゃんだと思いますか。



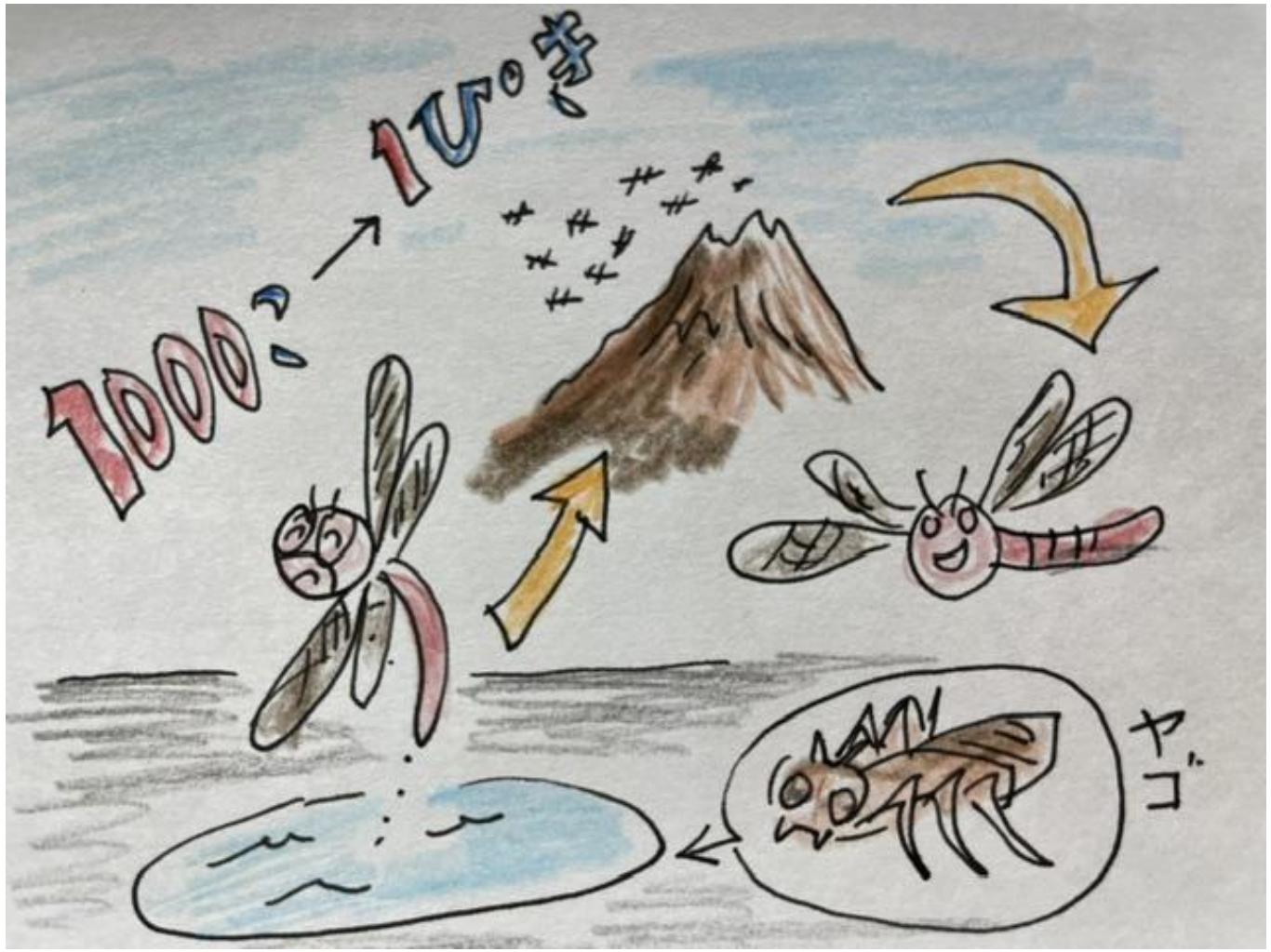
なんと、３０００個の卵から、
３０００匹の赤ちゃんがかえっても、
大人になるのは１匹。
０匹のこともあるのです。

みんなもよく知っているこんな卵
カマキリの卵からは赤ちゃんカマキリが３００匹ぐらいうじゃうじゃと出てきます。でも、いろいろな動物に食べられたり、死んでしまったりして、大人の立派なカマキリになるのは、３匹ぐらいなのです。



あんなに体の大きい、ウミガメのお母さんは砂浜の砂の中に１００個の卵を産みます。

いろいろな場所でお母さんウミガメが卵を産み、ようやく５０００匹の赤ちゃんが海の中に泳ぎだしたとします。それでも生き残って大人のウミガメになるのは１匹なんです。



トンボの幼虫

　最後に、今日、一年生、二年生が、プールで助けようとしているヤゴについてです。

　トンボの赤ちゃんであるヤゴは、実はトンボのお母さんが水の中に産んだ小さな卵から生まれたものです。

　トンボのお母さんは、
夏の間になんと１０００個ぐらいの卵を水の中に生みます。あちこちの水辺を探して生むのです。

　でも、そこから赤ちゃんがかえっても、魚に食べられてしまったりして、大きくなる前に死んでしまうのです。学校のプールには魚がいないので、トンボさんはここはいいなとえらんだのですね。

　そしてヤゴが大人になり、山の方へ飛んでいき仲間を見つけ、また卵を産むのです。
１０００個の卵から、ここまでになるトンボは１匹ぐらいらしいのです。
きびしい世界ですね。

ぼくらはみんないきている

作画　越智　健一郎（向井　一郎）